



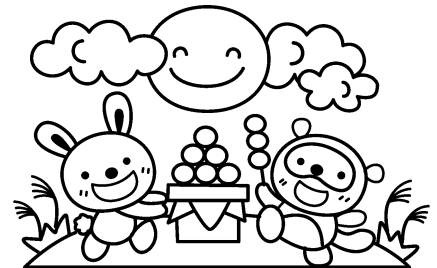
ひよこだより



都立葛飾ろう学校 乳幼児教育相談
令和5年9月1日 NO. 5

聴覚活用 ～「聴いて分かる」を育てる～

今年の夏は、気温 35 度を超える猛暑日が多く、厳しい暑さに見舞われましたが、皆さん元気に過ごされていたでしょうか。9 月に入り、少しずつ暑さも落ち着いてくれるよう祈りつつ、2 学期もまた子供たちや保護者の皆さんと楽しく活動していきたいと思えます。皆さんの来校をお待ちしていますね。

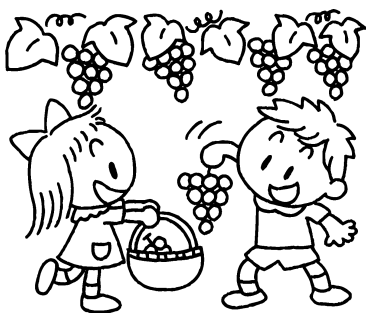


さて、夏休み中に 0 歳児の保護者の方から育児記録をメールでいただきました。ちょうど補聴器を付け始めて、やっと数カ月がたったばかりの中等度難聴のお子さんです。補聴器を自分で外してしまうことも覚えたので保護者の方は目が離せませんが、補聴器をつけていられる時間が少しずつ長くなり、玄関のインターホンの音に気が付くようになったという成長の様子が綴られていました。

すごいことが起きた!!! パパが帰宅し、インターホンが鳴る。A は遊んでいたが、インターホンが鳴った時にむくっと起き上がってモニターがある場所をみた。キョロキョロと音の発生場所を探すのではなく、ダイレクトにキッチンの角にあるモニターの場所を見た!!! 一緒にインターホンを確認し、玄関でパパのお出迎え。嬉しそうに足をバタバタ。これは偶然? それとも毎日続けてきた成果? こんなことができるなんてびっくりだ。そのうち、インターホンの音=誰かが家に来る音ということを理解していきだろうか? 宅配便が来た時もインターホンの応答から玄関での受け取りの流れをなるべく一緒にやってみよう。

インターホンが鳴ると、大好きなパパが帰ってくるということをお父さんとお母さんが協力して毎日のように繰り返し A 君に分かるように伝えてきた成果ですね。また A 君が中等度難聴のお子さんであることも、音に気づき始めが早かった要因の一つであると思えます。

乳幼児教育相談に通われている子供達の聴力レベルや難聴の種類は様々です。どの程度の音の大きさ (dB: デシベル) や高さ (Hz: ヘルツ) が聞き取りやすいのか、または聞き取りにくいのかは、一人一人違ってきます。聞こえにくさのある子供達の「聴いて分かる」を育てるには、まずは子供の聴力をしっかり把握することと、「聴く」ことのできる音を使うことが大切



です。補聴器をつけて間もない時期の子供にとって、耳から入ってくる音は、まだ意味をもたない雑音のようなものです。人は耳で音の刺激を感知しますが、それが何の音なのか、何と言われたのか理解するのは脳の働きです。さまざまな音を経験しながら、このサイレンの音は救急車、この音は鳩時計の音、これはパパの声、こっちはママの声と、脳が学習することで、音の意味が分かるようになっていきます。しかし、その学習は補聴器や人工内耳をただ装着しているだけでは進みにくく、聴者である身近な大人の意図的な関わりが必要です。

先ほどのA君の場合、保護者の方には個別相談の時に、インターホンの使い方についてお話をしました。インターホンの音量を大きく設定すること、お父さんが帰宅するときにはインターホンを数回鳴らしてもらうこと、インターホンが鳴ったらお母さんがA君に音が聞こえることを身振りを交えて伝え、モニターを見せること、それから玄関へ一緒に向かいお父さんを迎えることをお願いしました。初めは何が起きているのかわからなかったA君ですが、お母さんが繰り返しA君に「あれ、ピンポンって聞こえるね」「誰か来たかな」「パパかな」と語りかけながら、モニターを見せて一緒に玄関へ迎えに行くことを続けた結果、A君にとってインターホンの音が誰かが玄関に来たことを知らせる合図として意味をもつものになり、「聴いてわかる」音になりました。



保護者の方の関わりのポイントを、もう一度見てみましょう。

- ① 子供に伝えたい音が鳴ったら、「あれ？きこえるね」と耳に手を当て、子供に知らせる。
- ② 何の音か（音源）、どんな音か（音のイメージ）を伝え、見せながら確認する。
例）鳩時計の音であれば、時計の所へ連れて行き、鳩が飛び出している様子を見せて音を聴かせる。「鳩がポッポー、ポッポーって出てきた音だったね」と伝える。
- ③ 音にまつわる気持ちを伝える、または子供の気持ちを代弁する。
例）「鳩、ポッポー、ポッポー。面白かったね」
- ④ ①～③を、音が鳴る度に繰り返す。

気付かせたい音が子供の聴力で捉えられるものであること、音源や音に付随する結果が子供にとって魅力的であること、そして聴者である大人による①から④の働きかけがあることで、雑音のような音が、意味のある音になり、聴いて分かる脳が作られていきます。しかし、音源を探したり、音源を見つめたり、表情が変わったりする等の音に気付いた反応を、子供が見せてくれるまでには時間がかかります。我が子の聴力に合わせて、見えそうな音を見つけたら、1度や2度で諦めず繰り返し伝えていきましょう。どんな音がわかりやすいのかは、個別相談の時などに担当へご相談ください。持ち運べる程度の音の出るおもちゃであれば、持ってきていただければ学校の騒音計で音を調べることもできます。また、今は騒音計アプリもいろいろと出ていますから、使い方を一緒に確認してから、参考にしてみるのもいいかもしれません。音に対する気になる反応がお子さんにあった時には、補聴器の調整のためにも大切な情報ですから、ぜひ担当へもお知らせください。

さて、環境音の例を中心に聴覚活用について大切なことを挙げてきましたが、このような関わりが必要なのは、環境音だけでなく、音声の言葉や、歌や音楽等も同じです。子供に語りかける時に、注目を引きつけてから実物やカードを見せたり、手話や身振りなど見て分かる方法も合わせたりしながら、子供に聞こえるような音声を使っているか、声の大きさは十分か、話す速さはゆっくりめで、はっきりとした話し方かどうか、周囲の大人は気を付けていきたいですね。大好きな家族と楽しい遊びや経験の中で、分かりやすい語りかけがあるからこそ、子供はよく注目してくれるようになります。そして注目している時には、自然と聴く体勢にもなっています。子供が見たくなる、聴きたくなる工夫を考えていきましょう。（担当：松澤）

